

平成 9 年度ブリ種苗放流技術開発調査

福永 稔

目 的

本調査は、(社)日本栽培漁業協会の委託事業として、徳島県沿岸海域のブリの生態（移動・分散や成長等）を明らかにし、ブリ資源の添加機構の解明及び資源培養手法の開発のための基礎的知見を得ることを目的とし、昭和 63 年度より平成 9 年度までの間継続実施した。

平成 9 年度は、海部郡牟岐町大島での標識魚放流調査とブリ漁獲量調査を実施した。

材料及び方法

1 標識魚放流調査

徳島県南部に位置する牟岐町大島周辺海域で漁獲された天然ブリ及び放流地点に隣接した海南町の養殖場より購入した養殖ブリを用い、牟岐町大島南側海域において標識放流を実施した。

放流尾数及び放流魚の大きさは、平成 9 年 10 月 23 日に実施した第 1 回放流群が 216 尾、平均尾叉長 62.3cm、平均体重 3.5kg、平成 10 年 3 月 6 日に実施した第 2 回放流群が 167 尾、平均尾叉長 57.6cm、平均体重 3.1 kgであった。

2 漁獲量調査

1) 地区別漁獲量調査

漁獲量調査は、鳴門、阿南、海部の 3 地区について標本漁業協同組合（以下、漁協と略記する）を設け実施した。標本漁協は、鳴門地区が鳴門町・新鳴門漁協、阿南地区が椿泊・伊島漁協、海部地区が牟岐東・牟岐町・鞆浦・宍喰漁協の 8 漁協で各地区でのブリ漁獲の多い漁協を選定した。これら標本漁協の水揚げ伝票から、ブリの銘柄別の月別漁獲量を調査した。

2) 日別漁獲量調査

標本漁協の一つである鳴門町漁協の日別漁獲量と水産試験場鳴門分場の汲み上げ海水水温について調査した。

結 果

1 標識魚放流調査

各放流群の平成 10 年 3 月 31 日現在再捕報告状況は次のとおりであった。

再捕場所については、平成6年度と同じ分類とした。

1) 第1回放流群

再捕尾数は145尾で、再捕率は67.1%となっている。

再捕状況は、「大島」では、放流直後に6尾が、12月に2尾が、1月に1尾が刺網で再捕された他は、大部分が放流直後から3月まで放流地点の飼付漁場で釣りにより再捕されている。「南側」への移動は、放流19日目の11月中旬に宍喰町で2尾、約1ヶ月経過した11月下旬に海部町で1尾、宍喰町で2尾が釣りにより再捕されている。その後、宍喰町で1月に定置網、3月に釣りより各1尾再捕されている。また、「東側」への移動は、放流45日目の12月上旬に和歌山県日の御埼沖で釣りにより1尾再捕され、天然メジロ放流群としては2例目の移動であった。現在のところ「北側」での再捕報告はない。

2) 第2回放流群

再捕報告尾数は44尾で、再捕率は26.3%となっている。

再捕状況は、「大島」で40尾、「南側」の海部町・宍喰町で各2尾が再捕された。再捕漁法は、「大島」では釣りにより33尾、刺網により4尾、定置網により3尾再捕され、「南側」では定置網により3尾、釣りにより1尾再捕された。現在のところ「北側」「東側」での再捕報告はない。その後の移動分散状況については、年度末の放流になったため、今後の再捕結果により検討する。

これら再捕結果から、放流魚の移動分散状況は、退去の放流群と同様に3月下旬までは大部分の放流魚が、放流地点の大島周辺を中心に海部沿岸域で滞留していると考えられた。本年度の放流群の再捕状況の特徴としては、放流直後の再捕率が天然魚・養殖魚放流群とも、過去の放流群と比較して高くなっている。

2 標本漁協の漁獲量調査

徳島県で漁獲されるブリの銘柄は、小型の方からツバス、ハマチ、メジロ、ブリに大きく分類され、各漁協によりその区分は若干異なっている。調査対象とした地区ごとの銘柄区分概要は、平成6年度報告書のとおりである。

1) 地区別漁獲量

銘柄別漁獲量の年変動を年級群の変動として捉えるため、平成7年度と同様に漁獲量の底であり、0歳魚の漁場への来遊の直前である7月を境に、8月から翌年7月まで（以下、「漁獲年度」と呼ぶ）の漁獲量の集計を行った。

1996年度の標本漁協の漁獲量は、ツバス・ハマチが30.05tで平年値（10年平均：1985～1994年度、以下同じ）の28%と年変動は大きいものの1990年度より減少傾向にあり、1985年度以降最低の漁獲量であった。メジロ・ブリは27.05tで平年値の43%と前年度を更に下回った。

1997年度（8～3月集計、以下同じ）の標本漁協の漁獲量は、ツバス・ハマチが13.27tで、鳴門地区・海部地区の極端な不漁により平年値（10年平均：1985～1994年度8～3月集計、以下同じ）の13%と不漁であった前年度を更に下回る漁獲量となった。メジロ・ブリは61.19tで、阿

南地区で9月中旬から10月上旬まで小型定置網によるメジロの好漁及び海部地区で3月上旬に大型定置網によるブリの好漁が有り平年値の1.6倍の漁獲量となった。

2) 日別漁獲量の推移

1997年度の水温は、播磨灘5定点の海洋観測では、平年値(10カ年平均:1984~1993)と比較すると8~9月はやや高めで推移していたが、10月には平年並み、11月にはやや低めとなったが、12月に再び平年並みとなった。

鳴門分場の連続水温観測値と鳴門町漁協の日別漁獲量の推移を見ると、1997年度は、ハマチ・メジロとも水温が25℃になった8月中旬より漁が始まったが、その後まとまった漁がなく散発的な漁で推移し、ハマチは水温が18℃まで低下した11月中旬にわずかにまとまった漁が見られた後、水温が16℃まで低下した12月上旬で終漁となっている。

今後の計画

本事業は平成9年度で終了するため、昭和63年度からの10年間の調査結果について取りまとめを行い、(社)日本栽培漁業協会から報告書が発行される予定。